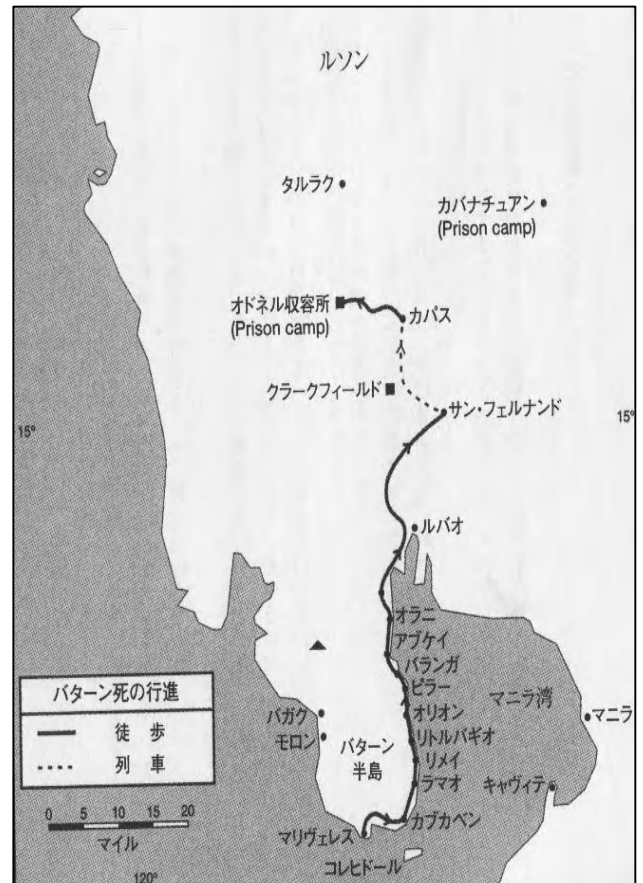


# バターン死の行進とフィリピン・台湾・奉天捕虜収容所 <Erwin&Ann Johnson夫妻の証言> (文責; 笹本・西里)

## ◆「バターン死の行進」とは

• 真珠湾攻撃の当日からフィリピンマニラ爆撃を開始した日本軍は、1941年12月23日、本間雅晴中将率いる第十四軍をルソン島リンガエン湾に上陸させた。3月12日マッカーサーは“*I shall return*”の言葉を残してコレヒドール要塞島を脱出、家族と共にオーストラリアに逃れた。4月9日バターン半島陥落。ウェンライト將軍の指揮下1万2千人の米軍、6万人の比軍、2万人余りの市民が日本軍に降伏し、捕虜となった。彼らはすでにマラリアや飢えなどで弱り果てていたが、バターン半島南部からオドネル収容所まで、炎天下100キロ近い距離を満足な水や食糧を与えられることもなく、徒歩で移動させられた。武器を捨て降伏した無抵抗なままの状態、脱落しそうな者は、容赦なく斬首、ライフル、銃剣などで殺された。病氣や負傷で衰弱し、倒れた者も含め、この間の死者は、米兵が1522人、フィリピン人29000人にのぼり、「死の行進」と言われる所以である。

• 約1ヶ月後コレヒドール要塞島も陥落。フィリピン内で捕虜になったアメリカ兵の多くは、カバナツアン、オドネル、クラーク飛行場などの収容所に収容された後、日本本土、台湾、挑戦、満州などの収容所に送られた。



上:「バターン死の行進」のルートと周辺の収容所



右:コレヒドールで降伏した米軍

# バターン死の行進の証言

Erwin Johnson(アーウィン・ジョンソン)



●降伏した時、日本軍の機関銃が我々を取り囲んでいた。そのままの状態で一晩眠った。翌朝250人から300人づつに分けられて出発した。一団の日本兵に出会ったが、彼らは我々の持ち物を片っ端から取り上げた。宝石や時計などが主に狙われているのが判ったから、僕はハイスクール・リングをはずして口の中に入れた。この指輪は捕虜だった間中なんとか盗られずにすんだ。

●歩いてゆく道すがら、物凄い数のフィリピン兵の死体を見た。日本軍の戦車が死体を踏み潰して走っていた。何日も食事をしていなかったし、我々の多くは病気だった。そういう状態で5日間の行進が始まった。時には一晩中歩かせられた。休憩といっても直射日光の下で地面にすわるというようなことだった。

1日目は一度も食事は支給されなかった。2日目に小さいライス・ボールが与えられた。水は自分たちの持っている水筒の水を飲むほかなかった。

●5日目の夜雨が降った。それでも我々は歩かせられた。隊列からはずれて動けなくなった者で、誰も助けようという者が居ない場合は、銃剣か、銃で殺された。

●途中で、赤ん坊を抱いたフィリピン人の女性がバナナの葉に包んだご飯を私たちに投げてくれていた。それを見咎めた監視兵が彼女のところへ行き、まず赤ん坊をむしりとって、地面に叩き付けた。それから彼女を銃剣で刺し、地面の赤ん坊も銃剣で刺した。

●サンフェルナンドに着いて行進は終わった。我々は貨車にギュー詰めめに押し込まれ、座ることも身動きもできなかった。全員窒息死するかと思った。貨車が動き出して、夜が明けると、少し風が入ってきてましになったが、結局この時僕が乗った貨車の中で3人が立ったまま死んでいた。2時間ほどで貨車が止まり、6キロほど歩いて着いたところがオドネル収容所だった。

## ◆台湾の捕虜収容所

台湾内には、台北、金瓜石、台中、員林、斗六、花蓮港、玉里、白河、屏東などに延べ10数ヶ所(臨時の収容所を含む)の捕虜収容所があった。シンガポールやフィリピンなどから送り込まれた捕虜たちは、鉱山、河川の改修工事、サトウキビ畑、製糖工場などで働かされた。

フィリピンで捕虜になった米比軍司令官ウェンライト、シンガポールで投降したイギリス極東軍司令官パーシヴァルなどの高級将校が、一時期、花蓮港や白河、玉里などの収容所に収容されていたが、その後、満州の収容所に送られた。また、南方から“地獄船”で日本に向かった捕虜たちが、疲弊して、台湾内の収容所に仮収容されるケースもあった



## ◆奉天捕虜收容所

●1942年10月7日1500人ほどの米兵捕虜が地獄船「鳥取丸」でマニラを出航。500人は最初の寄港地台湾の高雄から日本に送られた。(Tenny氏や昨年来日したReal氏)それから、釜山で下船、陸路満州の奉天(現在の瀋陽)に到着したのは11月11日だった。

ここには終戦までの3年半の間に、米、英、蘭、豪、NZなどの捕虜延べ2千人近くが収容され、満州工作機械(MKK)や満州皮革などで使役された。

当初は市街地北方8キロの国民党軍の宿舎だった北大宮で、後に満州工作機械の隣接地瀋陽市大東区地壇街30-3号に収容所を新築移転した。



11月の満州は冬が始まろうとしていた。夏服の捕虜達には外套が支給された。



1945年8月終戦で収容所が解放された直後米、英、蘭の捕虜兵

＜ANN Johnson(アン・ジョンソン)＞二等軍曹だった兄Charles Wilburは1942年12月28日奉天で腸炎のため死亡。

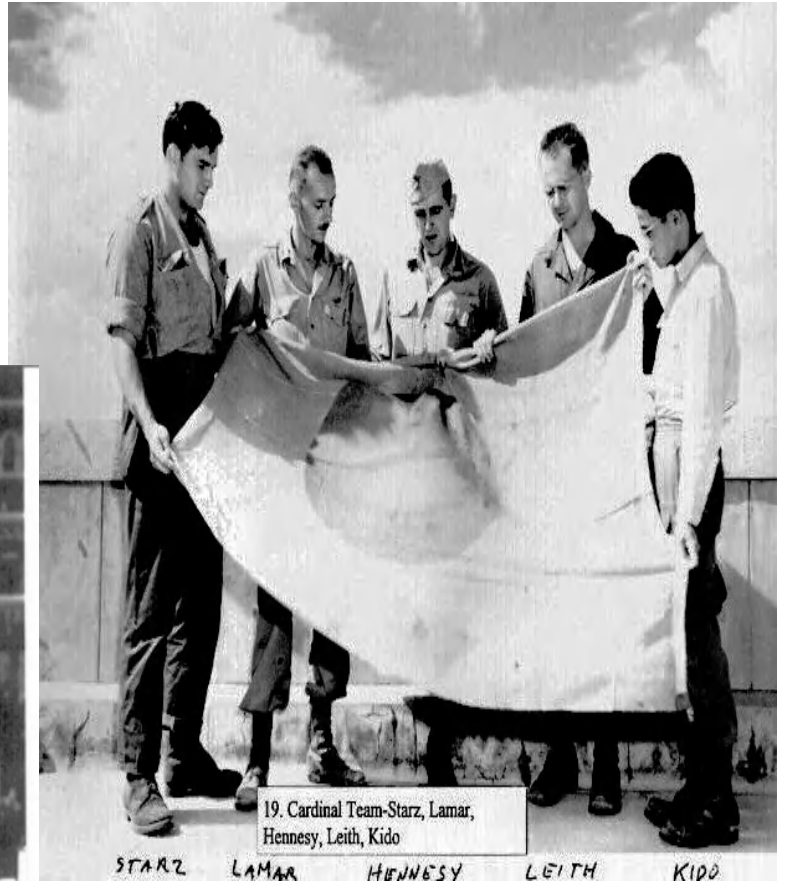
「兄は7人兄弟の長男で、私は末っ子だった。年が離れていたの兄は私を可愛がってくれた。母は、長男を亡くした悲しみの余り、30年間アルコール中毒状態で、家事や家族の世話などできなかった。」

# 奉天捕虜收容所の解放

## 捕虜救出作戦: ミッション・カーディナル

### by OSS(Office of Strategic Service)

OSSパラシュート部隊の隊長ハル・リースはロシア語と中国ができた。彼らの重要な任務は、奉天捕虜收容所分所に囚われているウェインライト将軍他の連合軍高級将校を救出することだった。そのため列車で奉天からは北東に240キロ離れている四平市西安に向った。



上: B24からパラシュートで降下したOSS部隊の5人。右端は二世の通訳その隣が隊長のハル・リース。奉天大和ホテルの屋上で日章旗を広げている。



左; 西安收容所から解放されて奉天に到着。大和ホテルで久々に寛ぐ4人の将軍。左からウインライト米陸軍中将、キング米陸軍少将、ムーア米陸軍少将、パーカー蘭印軍中将。翌8月28日ウェインライト将軍は横須賀のミズリー号上の降伏式に参列するため軍用機で奉天を離れた。奉天捕虜收容所の解放は事実上この間ソ満国境を越えて侵入してきたソ連軍が奉天に到達した時行われた。ソ連軍は日本軍を武装解除し、收容所の管理者たちはシベリアに抑留した。

# 現在の捕虜收容所跡



瀋陽の收容所跡地に昨年オープンした捕虜收容所博物館の入口(中国語では瀋陽二战盟軍戦俘营史実陳列館)



上:高級将校の收容所があった西安は現在は遼源。人民解放軍の敷地内に收容所跡の建物が残ってる。



收容所の一棟が当時のままに再現されている。写真は一昨年来日したグリフィス氏(2007年)



瀋陽大学には奉天捕虜收容所研究所が創設された。写真は所長の楊競(Yang Jing)先生。



# **ADBC (=American Defenders of Bataan & Corregidor Memorial Society 米軍バターン・コレギドール防衛戦士追悼の会)**

<http://dg-adbc.org/content/?s=367&t>About-Us>

- 年次総会を年に一度アメリカの各地で開催。2009年からは子供の世代が受け継ぎ、ADBC次世代の会 (Descendants Group)と名称を変えた。過酷な捕虜体験から精神的にも肉体的にも立ち上がるために年に一度、共通の思いを分かち合うことで、明日への活力を得るという意味を持っていた。年々捕虜体験世代は少なくなっている。
- 子供の世代が運営を引き継ぐADBCは、第2次大戦を戦った父たちの世代の勇気と自己犠牲の精神と、そしてあらゆる過酷で残酷な事実をも含めて日米双方の若者たちに正しく伝えることを使命としている。肉体のみならず精神に深い傷を負っているのが、日本軍の捕虜となった人々の多くに共通しており、長い間悪夢に悩まされるケースも少なくない。
- 2014年度は5月28日から31日まで、カリフォルニア州サンノゼHotel Hyatt Place San Jose/Downtownと決まっている。

## **Mukden Reunion;**

- ADBCの奉天捕虜収容所グループは毎年全米各地で戦友会 (Mukden Reunion)を開いている。数日間、家族ぐるみで集まる。今年(2013年)はこの10月東海岸のバージニア州ノーフォークで開かれ、24回目。Johnson夫妻はこれに参加し、11日ニューヨーク州の自宅へ戻り一日で荷物をまとめて日本へ旅立って来た。
- ほかに「バターン死の行進」の体験者による、BBB (Bataan Battling Bastard=バターン兵隊野郎の会)などあったが、オーガナイザー役が亡くなったことで消滅した。